

I 第一朗読(王上19章15―16、19―21節)

- 15 主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒野野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。16 「またアベル・メホラのシヤファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ」。
- 19 エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシヤファトの子エリシヤに出会った。エリシヤは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。20 エリシヤは牛を捨てて、エリヤの後を追いつ、「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行つて来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか」と。
- 21 エリシヤはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞つて食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。

語句の解説

- カルメル山でバアルの預言者と対決して勝利を収めたエリヤは、アハブ王の妻イゼベールに追われ、ホレブ(シナイ)山に逃げる。そこで、神に出会い、新たな使命を授かる。
- 16節 ■「油を注ぐ」。油を注がれるのは即位する王だけでなく、預言者も祭司も。
- 19節 ■「十二軛の牛」。これだけ多数の牛をひとりの人間が御することはできないと思われるので、イスラエルの十二部族を表す象徴か、あるいは富の豊かさを表すのである。■「外套を彼に投げかけた」。この象徴的行動は後継者としての選びを意味する(王下13)。
- 20節 ■「わたしがあなたに何をしたというのか」。この言葉を文字通りに取り「わたしが何をしたというのか。何もしていない」の意味だとすると、外套を投げかけたという仕事と矛盾することになる。その場合、「外套を投げかけた」を編集者による付加とすれば、畑で働いていたエリシヤのもとを通り過ぎようとしたエリヤを見て、これぞ従うべき師と見抜いたエリシヤの眼力が強調されていることになる。しかし、「わたしがあなたに何をしたのか」は、自己決断が大切だとエリシヤに教え、それを迫る言葉だと解釈するのも可能。
- 21節 ■「牛の装具を燃やして」。肉を調理するための燃料というよりは、古い生活からの離脱と見るべきだろう。■「人々に振る舞つて食べさせた」。弟子となるべき人に家族とのいとまごいをも許さなかつたイエスに比べると、いかにも人間的である。しかし、エリシヤは旧約聖書に登場する預言者の中でも少々、異質である。彼は弟子の集団を数箇所に持つており、政治にも直接に関与している。

①今日の朗読は、エリヤから外套を投げかけられたエリシヤが、エリヤの後を追いつ、「あなたに従います」と誓う物語だから、預言者の召命物語になる。しかし、私たちに奇妙に思えるのは、エリシヤに答えたエリヤが「わたしがあなたに何をしたというのか」と述べていることだ。外套を投げかけたのは、後継者への任命を意味するはずだから、この言葉は奇妙である。

そこで、聖書本文に手を加えずそのまま読めば、エリヤは「私はお前を後継者とした

いけれども、それは私の願いであって、決断しなければならぬのはお前だよ」と考えているから、「わたしがあなたに何をしたというのか」と述べたと説明できる。

これが正しければ、この召命物語では、有無も言わずに人を呼び出す神の力より、人間の決断に強調点が置かれていることになる。この事実は新約聖書の召命物語と比較するといっそう明確になる。マコニ14のレビの召命が典型的に示すように、新約の召命物語は次の五つの要素から成り立っている。

① ②として通りがかりに、(場所の移動)
③ アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、(出合い)

④ 「従いなさい」と言われた。(呼びかけ)

⑤ 彼は立ち上がって(今まで⁹生き方を捨てる)

⑥ イエスに従った。(信徒)

今日の朗読のエリシャの召命もほぼ同じ要素を含んでいるが、違いもある。エリシャは外套を投げかけるという象徴的な動作によって招いているが、イエスは「従いなさい」という言葉によって招く。この相違は両者の吸引力の違いから生じると言えるだろう。というのは、エリシャは従う前に家族のもとに戻っているのに、レビは即座に付き従っているからだ。イエスの招きにはエリシャにはない、神的力量があるので、呼ばれた者は抵抗する暇もなく、吸い寄せられてゆく。

エリヤは吸引力でイエスに劣っているが、それだけに、呼ばれた側の決断が大事になる。イエスが行う召命では、招く側の力に強調点があるのに対して、エリヤとエリシャの場合には、招かれた者の決意に重点が置かれる。だから、エリシャが家に戻って、牛を調理して人々に振る舞ったのは、家族や仕事への愛着心があつたからというよりは、古い生活からの離脱を決断したからだ。この離脱を象徴的に表すのは、「牛の装具を燃やす」という行為である。これは燃料が他になかったからではなく、新しい生活への決意を表明するためである。いずれにしても、彼は「立ってエリヤに従い」、エリヤに仕えることになる。

こうしてエリシャはエリヤの後継者となるが、両者の間には大きな違いがある。エリヤは主に仕える預言者として「一人だけ残った」とされるように(王上一九10)、いつも一人で行動する孤高の人だ。

しかし、エリシャは「預言者の仲間(弟子たち)」を持ち、彼らと共同生活をおこなっていたし(王下六一など)、イエフが起こしたクーデターでも重要な役割を果たしている(王下九章)。しかも、彼は多くの奇跡を行っているが、その中には「預言者」のイメージにそぐわない奇妙なものもある(王下二二三以下)。

預言者といっても、その姿は多様であり、時には強烈な個性を示すこともあるが、どの預言者にも等しく見られる特徴は、世俗の中に生きながら、それを超えて、神との新たな関わりに生きる道を選んだことにある。

② 外套(アッデレット)の用法。この語の語根は「他のものより力強く、優れている」を意味する。そこで、同根の形容詞アッディールは、「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう」(詩八二・10)という用例のように、「威光に満ちた力強さ」を表す。

このような語が「外套」の意味になるのは不思議だが、ヨシユ七二1の用例を思い起こせば、納得が行く。アカンは「一枚の美しいシリアル(パビロン)の上着」を盗み取

り、「銀を下に敷いて」地下に埋めているが、このような隠し方がこの上着の貴重さを端的に示している。

この語のその他の用例では、ほとんどエリヤが着用していた「外套」を表す。この「外套」は、創二五²⁵「毛皮の衣」やゼカ一三⁴「毛皮の外套」から考え、毛皮製であったかもしれないが、普通の衣とは違った異質性を強調する用法だと思われる。

このような「外套」を投げかけられることによって、エリシャは神に仕えるべき預言者としての優れた力を受けたのである。

Ⅱ福音書（ルカ福音書9章51―62節）

51 イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。52 そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。53 しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。54 弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。55 イエスは振り向いて二人を戒められた。56 そして、一行は別の村に行った。

57 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」59 そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

語句解説

51節 ■「天に上げられる時期」。九31にはモーセとエリヤが「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」とある。この「最期」と同様に「天に上げられる」とはイエスの苦難（受難と死）と栄光（復活と昇天）というエルサレムでの出来事すべてを指す。これは神の計画の実現である。■「決意を固める」。直訳すれば、「顔を固めた」。たとえ敵対するものがあっても自分の運命に敢然と立ち向かう固い決意を表す。

52節 ■「サマリア人」。サマリアはユダヤとガリラヤの間に位置する、ヨルダン川西岸の地域。民族的宗教的理由から、サマリア人とユダヤ人は互いに対立関係にあった（ヨハ四9参照）。

54節 ■「ヤコブとヨハネ」。この二人の弟子はマコ三17で「雷の子」というあだ名で呼ばれている。名にふさわしい反応である。■「天から火を降らせて」。意味からも言葉遣いからも、天から下った火によって五十人の人々を焼き殺したエリヤの故事（列王下一10―12）を踏まえた表現であることが分かる。

57節 ■「どこへでも従う」。この動詞アコルーセオーは、「自覚なしに後について行く」

ことから、「弟子として信従する」までさまざまな意味を表せる。マタイはこの人を「律法学者」とするが、エルサレムへの途上という設定から考えると、ルカはイエスに近い弟子の一人を想定しているだろう。

62節■「鋤」。当時の鋤は、片手で牛を操りながら、もう一方の手で舵をとらねばならなかった。機敏さと集中力を必要とし、後ろを向けば、十分に操作はできない。

①ルカ福音書は、今日の福音箇所を境にして前後に大きく二分される。それまではイエスの活躍の舞台はガリラヤだが、9:51に「エルサレムに向かう決意を固められた」とある通り、ここからはエルサレムへの最後の旅と、そこで起こった出来事について語られる。

イエスがエルサレムに向かうのは「天に上げられる時期が近づいた」ことを知ったからだ。この直前の箇所では、山の上で起こったイエスの変容（9:28-36）とその前後の死と復活の予告（9:21-27、43-45）が描かれている。今、イエスは確かに自分の使命を悟り、神の計画が実現するためにエルサレムへ向かう決意を固めている。また、その旅はイエスに従う弟子たちに要求されている「覚悟」を明らかにする旅でもある。

イエスが自分の死と復活を予告したとき、弟子たちには「その言葉が分からなかった」（9:45）と書かれている。弟子たちはこの旅でイエスの使命を理解し、彼に従う覚悟を身につけなければならない。「道を進んで行くと」（57節）で始まる今日の福音の後半部は、イエスに従おうとする三人との会話を描いている。イエスは自分に従おうとする弟子たちに求められる心構えを明らかにする。

51-56節には、預言者エリヤを想起させる表現が三つある。一つは51節「天に上げられる」で、これはエリヤが火の戦車に乗って昇天する姿（王下二11）の描写にも用いられている。次に52節「先に使いの者を出された」は、メシアに先立って使者を送ると語るマラ三1の表現とほぼ同じであり、マラ三23はこの使者を預言者エリヤとしている。三つ目は、二人の弟子が「火を降らせて彼らを焼き滅ぼしましょうか」と述べた言葉である。これはエリヤが天からの火によって人々を裁いた出来事（王下一10-12）を連想させる。ルカはエリヤを彷彿とさせる表現を用いて、神の支配が今ここに接近していることを示している。イエスは、ユダヤ人と敵対関係にあるサマリア人の村に入ろうとするが、神の支配はすべての人に例外なく宣べ伝えられるべきなのである。彼らは拒否され、イエスは「他の村へ」向かうが、神の支配の宣教は先を急ぐべき事柄だからである。

道中、三人の人がイエスに従う意志を表明する。最初の人は、無条件に「どこへでも従う」と申し出る。イエスは彼に向かつて「人の子（イエス）」の現実を教え、人の子は宿を拒絶され、安らぐ場所もないことを告げる。人の子がそうならば、従う弟子も同じ境遇に甘んじる覚悟が必要である。第二の人は、父の葬送が済んだら従おうと考えている。当時、死者の埋葬はすべてに優先する宗教的な義務とされていた。しかし、イエスはそれは「死者」がすればよいことであり、「あなた」は神の国を告げ知らせるべきだと語る。ここでの「死者」とは神の国の到来に気付かない人々のことである。

神の支配を目の当たりにした人は、何よりもその告知を優先すべきだとイエスは説く。イエスが伝える神の支配は死を克服する力を持っているからだ。三番目の人は「家族にいとまごいに行く」ことの許しを願う。それは人間として当然で、しかもささいな願いごとである。しかし、イエスはそれも許さない。問題は条件の大小ではなく、イエスに従う姿勢にある。畑を耕す鋤は、よそ見をすると畝筋が曲がってしまう。そのようにイ

エスにしっかりと結び付き、イエスが運ぶ神の国にまっすぐ目を向ける者が、神の国にふさわしいのである。

②顔（プロソポーン）。今日の福音の51節「…エルサレムに向かう決意を固められた」を直訳すると「エルサレムへ行くために顔を固めた」となり、52節の「そして、先に使いの者を出された」を直訳すると、「彼の顔の前に使いを遣わした」となり、53節の「…エルサレムを目指して進んでおられたからである」を直訳すると、「彼の顔がエルサレムへと行きつつあった」となる。名詞「顔（プロソポーン）」はさまざまな意味で使われる。

まず51節だが、ここでの「顔」は中心人物であるイエスが向かう方向を表しており、エルサレムへと顔をすえた、イエスの強い決意を示している。次の52節の「顔」は、派遣される者の出発点を表すが、それは同時に派遣者の権威を示している。最後の53節の「顔」は51節と同じ用法であり、向かって行く方向を表している。三度も「顔」を繰り返したのは、この場面の中心人物であるイエスにスポットを当てたためだろう。

Ⅲ今日の朗読から

牛を捨て（第一朗読）

今日の朗読の19節「自分の外套を彼に投げかけた」が、後から付け加えられた表現だとすれば、もともとはエリシャの決断が強調されていたことになります。エリヤを目にしたエリシャは「この人こそ仕えるべき師」だと直感し、信従を申し出たことになります。しかし、最初からあったのであれば、20節の「わたしはあなたに何をしたというのか」には「忘れるな」といった動詞を補い、「わたしがあなたに何をしたかを忘れるな」の意味に取らざるをえません。この場合には、エリヤの後継者としてのエリシャに強調点が置かれることになります。いずれにしても、エリシャが牛を捨てたのは、彼が新たな生き方に招かれたからです。

奴隷の軛に二度とつながらずに（第二朗読）

パウロはキリストによって与えられた自由を「肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」と論じます。ですから、パウロの考える自由は、何でもできるという放縦なのではなく、「霊の導きに従って歩む」ことを決断するための自由だと言えます。霊に身をまかせることなく、肉に従って生きるなら、「互いにかみ合い、共食いつている」という状態に陥ります。肉とは自分の考えや欲望を先に立てた生き方ですから、他人と衝突せざるをえないのです。キリストによって新たな生き方を示された私たちは「牛を捨て」、「奴隷の軛に二度とつながらずに」生きる道を選びました。

神の国を言い広める（福音書）

エルサレムに行こうとするイエスをサマリア人は歓迎しようとはしませんでした。弟子たちは彼らに天罰を求めようとしたが、イエスはそれを戒め、別の村に入って行きます。争いが無意味だからではありません。争っている暇がないからです。「牛を捨て」、「奴隷の軛に二度とつながらずに」生きる人たちは、「枕する所もない」と言われるイエスに従い、死者の埋葬は「死んでいる者」にゆだね、「家族にいとまごい」もせずに、神の国を言い広めることに専念します。彼らのもっとも重要な課題は神の国を言い広めることです。すべての人に神の支配が開始されたことを述べるために、わき目も振らずに進みます。